熊野の森から

怪しの熊野

其の五十九

「旧・田辺市の怪異（其の二）」

和歌山大学
システム工学部
環境システム学科
中島敦司教授

妖怪は、意外に人が好きである。このためか、人がまったく行かないような深山にすむことはまれで、人の臭いのする場所や時空の隙間に隠れ棲む。これは、その場の人口と妖怪の種数を比較すると一目である。例えば、今回から取り上げる旧・田辺市は、南紀の中では大きな街であり、農村部だけでなく街中にも妖怪が棲んでいることは「わかやま妖怪マップ」をながめていると分かる。

「わかやま妖怪マップ」の旧・田辺市周辺。市街地にも妖怪のマークがある。人口の多い場所では、妖怪の種類が増える傾向がある。

海坊主の一種「モクリコクリ」、法林寺の「白沢（はくたく）」、月が三つに分かれる「三体月」などは以前にも紹介した。それらだけではない。天神崎の「狸々（しょうじょう）」、芳養（はや）の「カワウソ」、中芳養の「スナホリ」、秋津町の「片羽根の天狗」、万呂の河童（かっぱ）「カシャンボ」、竜神山には「天女」の話も残る。山間部では「ダル」、長野の「弁天淵の主」、安珍清姫伝説にも登場する「清姫の捻木（ねじぎ）」などの話が伝わる。このように、人口の多い田辺には意外にも多くの種類の妖怪が棲んでいる。

田辺市の周辺では、妖怪ダルの末裔？「ダルダル」が目撃されることがある。話しはできないが筆談はできる。「ダルダル」は流行の「ゆるキャラ」ではなく、今も生きる妖怪であり「中の人」などは居ない。

一方、田辺、妖怪、というと、なんといっても南方熊楠のことが思い浮かぶ。世界的な博物学者、民俗学者であり、日本において自然保護の概念をいち早く主張した大学者だ。熊楠が地元熊野の妖怪研究に没頭したことと、田辺周辺の妖怪の豊富さとは無関係ではないだろう。研究題材の宝庫だったことは間違いない。以前のコラムでも紹介したように、科学者熊楠は、妖怪の正体の解明が可能であると考えていたようだ。しかし熊楠は、正体不明のモノまでを無理矢理に科学的に説明しようとはしていない。妖怪の存在に気付いたら、耳にしたら、対象を注意深く観察し、それが偽怪（ぎかい）つまり思い込みや見間違いなどではないかどうかを慎重に考察している。この熊楠の態度は、真怪（しんかい）、つまり本物の妖怪探しといえるもので、結果的に後生にたくさんの謎、宿題を残すこととなった。熊楠の研究の中ですら説明できなかった不思議は真怪候補として、いつまでも伝承されていくのだろう。だからこそ、日本全国のどの地域よりも、熊楠の歩き回った熊野の妖怪は、より本物性を持っていることになった。

中島敦司（なかしま・あつし）教授プロフィール

昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗（妖怪、伝承）。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30～50日は訪問し、研究する。